

除幕式出席して

東郷敏

成寿32号に、「京都清水寺瑩山禅師さまへの報恩顕彰の碑、発願者黒田倫子夫人」

この記事を観て私は思ったのです。なんでまた京都清水寺でなければならぬのか、どういう意味なのか、突拍子もない発願。(お断りしておきます、私の表現は拙く不遜。)

それにしても千三百年の名刹、清水の舞台にそんなことが簡単に許されるものなのか。環境

は世界文化遺産、国宝、重文オンパレードの地、景観を損ってはならない国の宝。しかも横浜善光寺ひとり発願そんなことが叶えられるものなのか、たとえば、わが庭に余所の碑が建つようなもの。方丈さまはいつでも桁外れ、これまで途轍もないことに驚かされている。少々のことには馴れっこになっているつもりだが何か違う。段々と拝見して参りますと、ようやく納得。時

代は八〇〇年前にさかのぼる、曹洞宗高祖道元
禅師さま、太祖瑩山禅師さまが、清水寺の観音
さまを篤くご信仰なされ、深い深いご因縁のあ
ることを承知する。しかしまたなぜ倫子夫人の
発願発想であり、夫人が私財を投じてまで建立
せねばならぬのか、これもわかりにくい。その
意味するところは、駒沢女子大学東学長も詳し
く述べていられるが、のちお尋ねし此処に至つ
た動機と経緯を承るとき、一朝一夕のものでは
ないことがようやくわかる。

ときあたかも開祖ご生誕八〇〇年、没後七五
〇年の大遠忌を期に、また世紀的にも、二〇〇
一年という大きな節目、理法に従い縁りて起つ
た因縁なのか夫人が無心にして発願。それに相
応するかの様に事は諄々と不思議もなく実現し
てしまった、単に思いつきではなく実に久しい
間の悲願、実に禅語に謂う、啐啄の妙、「啐啄同

時」のタイミング。歴史的瞬間のときである。
全山紅葉に燃える清水の舞台、私はこの世紀的
瑩山禅師さま顕彰の碑、除幕の様子を、心なら
ずもご出席できなかった横浜善光寺檀信徒ご関
係者の皆様に具に伝えたく書かせていただく。

この碑の建立は、ただ単に顕彰し、建立した
ということではない、世界観に立脚する黒田方
丈夫人が是非も建立せざるを得なかった御信条
を知るとき、知ると知らないでは天地ほどの相
違あることに心底気づかせていただいた。発願
し、ここに至るまでの過程は並のご苦勞ではな
かった。まさに道元さまの「仏道をならふとい
うは、自己をならふなり、自己をならふとい
うは自己をわするるなり」の教えに従っている。
自己犠牲によって実現したこの報恩行。夫人は
謂う、

「私は北陸越前の地に生をうけ、生まれながら
に仏道にご縁を深くした。とりわけ瑩山禅師さ

まと、同じ景色、同じ環境、同じ空気のなかに生かされてきたこと、まことにありがたく感じ入っております。かねてよりコツコツと用意させていただいた資財によつて、瑩山禪師さまと、清水の観音さまとの、えにしを印した顕彰の碑を建立し、報恩のまことが捧げ得られるならこれ以上の至福はなく、捧げても捧げても捧げ足りぬ気持ちで、檀信徒の皆様ともどもに仏法へのご縁をさらに深くしたいと念願しています。「まことこの碑に懸ける夫人のご信念を伺い知ることができました。

ささやかなひとりの発願は、大きなうねりとなり、除幕の式で沸騰、思いもかけない、曹洞と清水の絆を一気に引き寄せ、強固にしてしまいました。み仏さまと、観音さまのなさることはまことに美しい。ご臨席の方々は実に多様、京都府下寺院四百カ寺を代表する宗務所長をは

じめ、各宗派代々お歴々、曹洞宗檀信徒を代表する田中慶秋衆議院議員、また宗界各報道機関数十社がこの慶事を取材しようと詰めかけている。その賑わいのなかに、清水寺森清範猥下とご関係者、曹洞宗大本山總持寺板橋興宗猥下並びに全国曹洞宗各ご代表、さらには横浜善光寺檀信徒各ご代表など約百名のご列席のもと、板橋猥下ご親修による、大読経と共に音羽の山に顕彰の幕は美事開かれ、三重の塔を背に瑩山禪師さまのご遺徳を偲ぶことができました。これよりいく世紀にも亘り、両宗派の絆は固く結び、大勢の人たちに影響を与えるであろう印として建ちつづけてゆくことになりましょう。

そのことは両猥下の祝辞にも表わされ、大僧正森猥下は、「錦秋の清水寺に、瑩山禪師さま顕彰の碑を建立されたこと、まことにめでたい。本日は施主の黒田さまとご関係者のご臨席のもと、ほんとうに大勢の方々がご随喜賜わりあり



がたい。瑩山禪師さまと清水の観音さまとの縁は夙に深く、それを銘記するこの碑の建立は、曹洞宗と清水寺のえにしをさらに深く篤くする表徴である。」とのお祝辞。

また板橋猯下は、「天下の名刹音羽山清水寺で、わが宗門と深いご縁で結ばれたことは、宗門にとってまことによるこぼしい。此処に至るまで、清水寺貫主森猯下のご理解と、施主並びに横浜善光寺檀信徒の皆様にご感謝の念申し上げたい。殊に黒田住職夫人には感謝一杯。全国より馳せ参じたわが宗門にご参詣いただいた方々にも深く感謝したい。合わせてこれから、わが宗門と清水寺さまの隆昌と繁栄を祈念する。」

両宗猯下のおことは、異口にして同音、瑩山禪師さまのお徳を偲びつつ、両宗の固い絆を結び直し、永遠の契りを確認することとなりました。

清水のご詠歌『松風や音羽の滝の清水を結ぶ

心は涼しかるらん』西国三十三ヶ所巡り、第十六番札所、その真ん中にしてバランスの要所、清水の観音さまと親しまれ、門前町は四季も折々大賑わい。人の波は吸い込まれるように流れつく観音さまのお膝許。変幻自在、救いを求める人々を願いに応じて救うてくださる。まことに慈母慈愛の象徴。道元禪師さまの謂う「自未得度先度他の心」倫子夫人もまたこのご威光に導かれ、四枚の般若・薩埵の行願ここに成就。道元さまの詠う、『春は花 夏ほととぎす秋は月 冬雪冴えて涼しかるらん』なぜか清水のご詠歌と音色が類似するいかにもトーンオン・トーン。式もたけなわ緊張の中にも安堵の色、倫子夫人の謝辞は続く。「こん年は道元禪師さまご生誕祭に続き、大回忌祀の重なる大事に合わせて清水寺さまの破格のご厚意により念願叶い、本日はまた両猯下さまのご臨席のもと、まことに盛大且つ賑々しく除幕の式執り行うことができま

したことは、私にとって生涯忘れ得ぬ尊きこと、身に余る、否身に余り過ぎる光栄を感じています。いまは唯々、生まれて来てよかったとそのよろこびと感謝の念に浸っております。」と頬も紅潮。

いよいよ式典もエピローグ。しかしながらここで終らないのが横浜善光寺の流儀。

女房倫子の挨拶に足りぬところ、一言ふたと、みこと御礼のことば重ねたいとの黒田武志方丈。「大本山清水寺大僧正猥下並びに、曹洞宗大本山總持寺板橋猥下のご臨席を賜わり、本当にありがたく、述べて尽して心より厚く御礼を申し上げます。また建立に多大のお力添えをいただいた駒沢女子大学東隆眞学長に深い感謝を申し上げます。学長は本日公務多忙につきご出席叶わず、その代理としてご子息、ご長男がご出席下さいました。堂々たる男ぶり本日の顕彰碑除幕、まこと空は遠く澄み雲一点もない、全山

紅葉に染まり絵にも言えぬ美しき清水の舞台、身に余る光栄とは申せ、処は世界文化遺産の景勝と名所清水寺の一等地、出過ぎた感が致します。その上碑があまりに大きすぎて、当寺宗務部長さんをはじめは驚いておいででした。私は『瑩山禅師さまのご遺徳、いまは大きくても、やがて周りの樹が大きくなれば、小さくなります』と申し上げました。そんなことで心よくお許しいただきました。遠く八〇〇年の昔曹洞宗ご開創のころ道元さま、瑩山さまも、きつと親しくこの地観音さまにお参りなさったであろうことを思い偲ぶとき、まことに感無量。殊に瑩山さまは、観音さまの影響を受けられたのでしゅうか『女性を大事にしる、尊くして敬いなされ』と仰せでした。さらには檀信徒の方々を大事にしるとの教え、これは即観自在・観世音・観音さまと同意。私の女房倫子が執着したのもお解りいただけることと思えます。これからは女性

の時代、それだけに、この碑は二十一世紀にふさわしい慈愛の象徴、まことにありがたいことです。ここ清水寺は、京都で唯一、朝六時開門、夕方六時に閉門、これは清水さんだけの特権。世界中の旅人が京都に居て、どこにも行けない、そんなとき期せずして『清水に行こう』となる。年間平常参拝者は七、八〇〇万人にもなる名刹、世界のため、日本のためいよいよ清水の観音信仰のお力が、世界平和に大いなる影響を及ぼすとき、曹洞宗もこのお徳あやかに肖り、お釈迦さま、観音さまに感謝申し上げて、また歴代祖師方に厚く厚く御礼と感謝の誠を捧げつつ私も仏道に身を尽くし、限り尽くして精進したいと誓っておりです。」と黒田方丈らしい精一杯のご挨拶。かくして顕彰除幕の式は無事終了した。

——あながき——

清水寺の境内は広大、私に観光案内をするつ

もりはありません。しかしいったい清水寺のどの位置に顕彰の碑が建立されているのかのちちご参詣なさる御方のためにと思いつ、チョツとだけです。

清水寺は「古都京都文化財」の要。東山添いを歩いていると、どの道のぼっても、行き着くところは清水寺。清水の舞台は一三九本の束柱つかに支えられ組み上げられている舞台造りの代表。「清水の舞台からとび下りる」はあまりに有名。現在の本堂は三代將軍家光公によって再建されたという、建物全体が国宝。ご本尊は、十一面観世音菩薩。創建は七八二年というからおよそ千三百年の歴史をもつ。参詣には、五条坂、清水坂、八坂道、二年坂、三年坂、ま坂とお思いでしょうがどの道通っても門前で合流する。

門前町の坂を上りつめると、仁王門、その右に八脚朱塗りの西門、左前に馬駐や鐘楼があり、さらに入口左側第一番目の辻堂に標札、「清水善

光寺」という建屋。なぜ清水寺の境内に善光寺なのか、伺っていない。その昔、もしもお参りすな微きとき、牛の鼻でも借りたいとの観音さまの手立てだったのか、承知していない。ただそこに善光寺があるだけで、私にとつては横浜善光寺と直結されるから不思議でない。入口正面左側に清水善光寺。右側入口に横浜善光寺瑩山禪師さま顕彰の碑。これでは手前味噌。さて正門を入ると三重の塔、進むに従い経堂をはじめ多くの堂が並ぶ。さらには奥の院まで十五棟の伽藍・堂が並びそのすべては、国宝であったり、重文の文化財。本堂より舞台を抜け仁王門前より右へ回ると、三筋で名高い音羽の滝に出る、さらに舞台を見上げながら三重の塔を真上へのぞむところに茶店があり、ここで一服する、その真前に十一重石塔がそびえ立つ。道を挟んで右側は池、この石塔の真下が顕彰の碑建立の地であります。

さて式典が終って一週間ののち、突然方丈ご夫妻が京都に舞い戻って来られた。私は地元、京都の隣・高槻に住む。連絡を受け、女房は御髪の手入れもままならぬ俵にご夫妻を出迎え、案内役を買って出る。用向きは清水寺に御礼詣りにとのこと、到着は昼下がり、さてまずは何処にと伺えば、指示は名刹建仁寺。しかし私は全く知らない。かつて道元禪師さまが、中国天童山より帰国して間もなく此処建仁寺に過ごしたという由緒ある寺らしい。さらには瑩山禪師さまも過し、この地ではじめてお茶を日本に広められた有名な寺だという。周りは茶の原木に敷きつめられ、さながら茶園の中のお寺。瑩山禪師さまを偲んでお茶発祥の地なる顕彰の碑が建っていた。当然にして国宝重文の文化財に埋もれた国の史跡、名勝の庭園に坐して過ごす。夕方六時ようやく清水寺へのぼった。お礼参りにしては悠長すぎている。六時は閉門のはず、

ところが参道門前は数百人に亘り人垣がつづく、おそらく数千名の人たちが手に手に入場券をもって震えながら佇んでいる。この時期、夜の紅葉と、月の庭などで有名な成就院庭園の特別公開がなされていることを方丈夫妻は知っていた。

地元の私は全く知らないでいる。参道に待つことと三十分、ようやく人並が揺れ動き出し押しつ押しされつ十五分。成就院の庭園にたどり着く。

私は尋ねてみる。「方丈いったい猥下さまへの御礼詣りはどの様に」と。方丈は謂う、「此処に坐していることが、私の感謝報恩の在り方」。冷えびえとした月の庭園に過すこと二時間、私の趣味を越え忍耐と我慢の観賞をさせていただきました。ようやく坐を移し建立したばかりの夜の顕彰の碑を拝しながら読経合掌低頭して山をくだる。「あらためて参ります」とひとりごとを呟きながら山を仰いでいる方丈、やはり私は仙人とは過ぎしにくい。さて山を下りるとあわただし

い、どうしても最終列車にと、21時33分発のみ98号鴨の背中に飛び乗って、ピューと方丈夫妻は東の彼方へと消えてしまわれた。風か嵐か知らねども。

京都に僅か数時間の滞在ながら精一杯、道元禅師さま、瑩山禅師さまに思いを致し、清水寺大僧正猥下さまへの御礼と報恩の旅、さぞかし、倫子夫人もお疲れになったことであろう。私も疲れました。方丈さまおひとり、なぜか、益々盛ん。やはり並のお方ではないことをいやという程知らされました。私の躰はつめたく冷えきっているのに方丈のお顔は紅潮しほてほてと蒸気を発している、いかにも機関車だ!!! ひとつきながらいい勉強をさせていただきました。ありがとうございます。